KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

疑問文発話解釈における話者態度の高次のメタ表示

メタデータ	言語: ja 出版者: 関西外国語大学・関西外国語大学短期大学部 公開日: 2016-09-05 キーワード (Ja): 修辞疑問文, 思索疑問文, 解釈的類似性, 帰属的思考, 高次表意 キーワード (En): 作成者: 後藤, リサ メールアドレス: 所属: 関西外国語大学
URL	https://doi.org/10.18956/00006039

関西外国語大学 研究論集 第100号（2014年９月）
Journal of Inquiry and Research, No.100 (September 2014)

疑問文発話解釈における話者態度の高次のメタ表示

後　藤　リ　サ

要　旨

本稿は、Sperber and Wilson（1986/1995[2]）他が提唱する認知語用論的推論モデル（関連性理論）を疑問文発話解釈に用いることの有効性―特に関連性理論の主要概念「解釈的類似性」及び「認知効果」を用いた分析方法が、疑問文のサブタイプの解釈に与える貢献―について論じることを目的とする。とりわけ驚嘆や皮肉的態度等の話者の感情が明示的に伝達されている事例について、話者の感情表出が、疑問文の情報要請性や修辞性の認知語用論的解釈にどのような貢献をするのかについて検証を行う。話者の感情表出は、命題態度としての高次表意、或いは推意として復元され得るが、その高次のメタ表示、及び「字義性」、「帰属性」、「関連性」に関わる主要な３つの解釈的表示が解釈の鍵となることを踏まえ、疑問文発話の修辞性理解という観点からの話者態度の再解釈を行う。

キーワード：修辞疑問文、思索疑問文、解釈的類似性、帰属的思考、高次表意

０．はじめに

コミュニケーションにおける疑問文発話の機能は多岐にわたる。以下の(1)に挙げる様々な疑問文発話においても、角括弧内に与えられた文脈情報により、丸括弧内にあるような疑問文の機能や話者の感情を伝達するものとしての解釈が可能となる。多くの事例において解釈は文脈に依存しており、ほんの少し異なる文脈が与えられただけで、全く異なる解釈となったり、解釈に揺れが生じたりする。つまり、(1)に挙げた疑問文発話群において、丸括弧内の機能や話者態度等に基づく分類は、極めて語用論的な視点によるものであり、角括弧内の文脈情報を入れ替えれば、別の解釈―例えば(1a)に修辞疑問文としての、(1e)や(1f)に試験疑問文としての、そして(1g)に純粋な情報要請としての発話解釈―を与えることが可能である。

(1) a.［**週末に友人がバハマに行くといっていたことを思い出し**］
　　Are you going to the Bahamas?（**情報要請の確認疑問文**）　(Gutiérrez-Rexach 1998)
　b.［**招待したパーティに来なかった人が実は動物園に行っていたと聞いて驚いたように**］
　　Did you go to the zoo yesterday?!（**驚嘆の感情を伴う疑問文**）　(Nishikawa 2010)

c．［**チョコレートを片方の手のひらに隠して**］Which hand is it in?（**当て推量疑問文**）
（Wilson and Sperber 1988）

d．［**面接試験官が受験者に**］What are the binding principles?（**試験疑問文**）（*ibid.*）

e．［**話者は１人で部屋にいるが、窓の外を見ながら**］
Why do the leaves of different trees go different colours in autumn?（**思索的自問**）
（Sperber and Wilson 1995[2]）

f．［**友人たちとくつろいだ雰囲気での談笑中、話のタネとして**］
Now, who is going to win the by-election tomorrow?（**思索疑問文**）（Blakemore 1992）

g．［(1f)**と同じ状況において、嘲笑的に**］
Have politicians ever kept their promises?（**皮肉的態度を伴う疑問文**）
（Wilson and Sperber 1988）

h．［**満天の星を観ながら、恋人に**］How many stars are there in the sky?（**修辞疑問文**）
（Rohde 2006）

i．［**大学の講義で、教授が学生に**］
What are the main objections to this approach? First, … .（**解説疑問文**）
（Sperber and Wilson 1995[2]）

(1)に挙げた疑問文発話群において、(1b)と(1g)は話者の感情―驚嘆や皮肉的態度―が明示的に伝達されている例である。疑問文発話に伴われるこうした話者の感情の表明が、疑問文の機能の解釈過程においていかなる貢献をするのかは、興味深い問題である。筆者の直観的には、(1b)は話者の強い感情が表出されながらも、確認疑問文としての情報要請性が失われておらず、一方、(1g)においては皮肉的態度―ここでは候補者への嘲笑的態度―の明示的な伝達意図があり、それゆえに情報要請の機能が薄れ修辞性が強い疑問文である。[1] しかし、驚嘆や嘲笑的態度感情表出それ自体が、疑問文の情報要請性や修辞性の解釈に貢献するといえるのだろうか。貢献するとすれば、認知のメカニズムにおいていかなる貢献を与えるのであろうか。次節以降において、(1b)(1g)も含め(1)の様々な疑問文について、話者が意図する伝達内容の解釈へと到達するための認知的推論過程のメカニズムについて詳しく見ていく。次節では、関連性理論の枠組みでの認知語用論的推論過程について概観し、続く第２節では驚嘆の感情を伴う疑問文発話の事例を中心に、その認知語用論的推論過程について考察を行う。第３節では程度性としての情報要請性、修辞性を理解するための重要な概念である、「解釈的類似性」について概観し、様々な機能を持つ疑問文発話事例の解釈の分析を詳述する。第４節では、前節までの考察を踏まえ、驚嘆等の感情表出や思索性の扱いについて疑問を投じ、関連性理論が提案する多層的な「解釈的使用」の概念に基づいた疑問文発話解釈への筆者の新しい視点を提示する。

1．関連性理論と認知語用論的推論能力

認知語用論という別称で呼ばれる関連性理論は、Sperber and Wilson（1986/1995[2]）が Grice（1989）の会話の格率の一つである、関係の格率（Maxim of Relation）（即ち、Be relevant.「関係のあることを述べよ」）を発展させたもので、認知と伝達に関する以下の２つの関連性の原理がその主軸となる。

(2) a. Human cognition tends to be geared to the maximization of relevance.
b. Every act of ostensive communication communicates a presumption of its own optimal relevance. (Sperber and Wilson 1995[2]: 260)

Grice の語用論と関連性理論の根本的な違いは、４種の格率を下位カテゴリーとして有する Grice の「協調の原理」がそれを遵守することを前提としているのに対し、関連性理論における２つの関連性の原理は、遵守されるべき原理、原則というよりは、「われわれが不可避的に遺伝の法則に従っているように、すべての発話に例外なく備わっているものである（内田 2013: 39）」。[2]

関連性理論の主張は、発話（意図明示的刺激）の言語表現それ自体が持つ意味論的意味は不完全なものであり、解釈者はその不完全性を推論によって補っていかなくてはならない、ということである。その語用論的推論のプロセスは２つに区別され、言語情報を推論によって拡充し発話が伝達する思考を復元させるプロセス、及び純粋な推論のみによって発話が伝達する思考を復元するプロセスであるが、いずれの推論プロセスも認知と伝達に関わる２つの関連性の原則に基づき処理される。このうち前者の拡充のプロセスには、（意味論的）曖昧性の除去、飽和、自由拡充、アドホック概念形成の４つがある（Carston 2002他）。曖昧性の除去（disambiguation）は、多義的な語や発話を一義化することを、飽和（saturation）は、指示表現の同定や省略されている要素の復元を指す。次の(3)の会話における(3a)、(3b)の発話は共に意味的に不完全な例であるが、まずは(3b)の推論的解釈プロセスを見よう。

(3) a. Bob: Are you going to the Bahamas this weekend?
b. Ann: I'm too busy.
(4) a. X (I) am too busy.（**論理形式**）
b. *The speaker (Ann)* is too busy.（**飽和1：指示表現の同定**）
c. The speaker（Ann）is *too* busy *to go to the Bahamas.*（**飽和2：省略されている要素の復元**）

(3b)の発話理解の過程では、不完全な概念表示としての論理形式から、２種の飽和、即ち指示表現の同定や省略されている要素の復元の過程を経て(4c)の完全な概念表示へと拡充される。

他の拡充のプロセスについては次の通りである。表出命題の変項やスロットに言語要素を補填することによる拡充である飽和とは異なり、自由拡充（free enrichment）は、自由に語用論的に言語要素を補うことを指す（例として、Sally drinks.という自明の理を示す表出命題から Sally drinks alcohol.への拡充)。アドホック概念形成とは、コード化されている概念が狭められたり（narrowing）緩められたり（loosening）した結果その場限りの概念表示が形成されることを指す（狭めの例として、ある行為 A をするには疲れていないが、別のある行為 B をするには疲れている、といったアドホック概念 tired*を伝達する場合)。

関連性理論では、発話の論理形式を発展させた(4c)のような想定を表意（explicature）と呼び、一方、語用論推論のみを経て得られる想定を推意（implicature）と呼ぶ。以下に定義される通り、表意、推意はそれぞれ、発話の明示的意味と非明示的意味に相当する。

(5) a. An assumption communicated by an utterance U is explicit [hence an 'explicature']
if and only if it is a development of a logical form encoded by U.
[Note: in cases of ambiguity, a surface form encodes more than one logical form, hence the use of the indefinite here, '*a* logical form encoded by U'.]
b. An assmption communicated by U which is not explicit is implicit [hence an 'implicature'].
(Sperber and Wilson 1986/1995[2]: 182, cited in Carston 2002: 116)

(3b)が(3a)への返答として適切な（つまり関連性理論においては(2b)のように「最適な関連性の見込みを伝達する」）発話であると考えると、聞き手は推論を経て、次の(6)の推意―(3a)の疑問文への答えに相当する想定―を心的環境において顕在的にする。

(6)は(7)が示すように(4c)で得られた表意［=(7b)］と推意前提(7a)を前提とする演繹的推論の帰結として復元され得る想定である。帰結として推意されたこの新情報「話者はバハマに行かない（行けない)」は、(3b)の発話以前に解釈者（聞き手）が有していた既存の想定「話者は今週末バハマに行く」と矛盾を引き起こし、既存の想定が削除され、新情報が認知環境に加えられる。新情報と旧情報との相互作用により生じるこのような認知環境の修正は、「認知効果（cognitive effect)」と呼ばれる。「認知効果」には、新情報による既存の想定の削除の他に、(新情報と旧情報を前提とする演繹推論の帰結としての）文脈含意、既存の想定の強化の２つがある。

(6)（The answer is）No, the speaker is not going to the Bahamas the weekend.

(7) a. **前提１（推意前提）**：If the speaker is too busy, the speaker is not going to the Bahamas.

b. **前提２（表意）**：The speaker is too busy to go to the Bahamas［=(4c)］.

c. **帰結推意**：The answer is No. The speaker is not going to the Bahamas this weekend［=(6)］.

このように関連性理論において求められる推論能力とは、聞き手（解釈者）が話者の心を読み取る能力、即ち「メタ表示能力（metarepresentational ability）」と呼ばれる認知語用論の能力である。関連性理論の推論モデルは、話者の感情を伴う思考の復元についても適切な説明を与えることができるだろうと考える。(3b)の話者の感情の表出は、発話の表意の一部として、或いは推意の一部として伝達され得る。例えば「確信」や「主張」などの発話行為に関わる話者態度や、「驚き」や「落胆」などの話者感情に関わる態度は、それぞれ次の(8a)-(8d)のように(4c)の表出された命題を埋め込んだ高次のスキーマ（イタリック表記）として復元され得る。(4c)は基本表意、(8a)-(8d)は高次表意と呼ばれる。

(4c) The speaker（Ann）is *too* busy *to go to the Bahamas.*

(8) a. *The speaker is sure that* he or she is too busy to go to the Bahamas.

b. *The speaker insists that* he or she is too busy to go to the Bahamas.

c. *The speaker is surprised that* he or she is too busy to go to the Bahamas.

d. *The speaker is disappointed that* he or she is too busy to go to the Bahamas.

２．疑問文発話解釈におけるメタ表示

２．１　高次表意として復元される話者態度

今度は、(4a)の疑問文について考察する。便宜上、(4a)を(4)の会話のインタラクションから切り離し、(9a)として再考する。

(9) a. **発話** Are you going to the Bahamas this weekend?

b. **命題** The hearer is going to the Bahamas at *t*.

c. **高次表意** The speaker is asking whether the hearer is going to the Bahamas at *t*.

文タイプが異なる発話であっても同一の命題内容を有することがある。例えば次の(10a)-(10c)の３つの文はいずれも同等の命題内容を有し、同等の基本表意を伝達するが、高次表意のレベルで異なる。

(10) a. 平叙文 You are going to the Bahamas this weekend.
b. 命令文 Go to the Bahamas this weekend.
c. 疑問文 Are you going to the Bahamas this weekend? [=(9a)]

平叙文(10a)の場合のみ、命題内容が明示的に伝達されている（Carston 2002: 117)。

疑問文が伝達する高次表意は、(9c)のような発話行為に関するものだけではない。(9a)[=(10c)] の発話が、次の(11a)から(11d)の［　］内に示された声のトーンで発話されたとしよう。

(11) a. [**特定の感情を示さない声のトーンで**] Are you going to the Bahamas this weekend?
b. [**訝しげに**] Are you going to the Bahamas this weekend?
c. [**驚いて**] Are you going to the Bahamas this weekend!?
d. [**皮肉的に**] Are you going to the Bahamas this weekend!?

異なる声のトーンは、発話の表出命題(9b)(表意に相当）への話者の確信性を示していると解釈可能である。(11a)-(11d)の各発話において、聞き手（解釈者）の旧情報（既存の想定）と発話時或いは発話時以前に与えられた新情報との和から生じる認知効果が、確信性の程度と関連づけられ、疑問文のサブタイプの解釈に貢献するだろう。例えば、既存の想定（「聞き手が一週間の休暇を取りバハマ旅行を計画している」）と新情報（「仕事が忙しくそれどころではない（ようだ)」）への話者の確信性が同等である場合、確認疑問文としての解釈となるだろう。一方(11c)の驚嘆の感情が生まれる背景には、既存の想定「聞き手がバハマに行く」の命題内容と乖離のある想定（新情報）が、認知環境に存在している必要がある。逆に、既存の想定と新情報との間に乖離が認知され得ない文脈では驚嘆の感情は生じないはずである。一方、(11d)の皮肉的態度が伝達される文脈とは、聞き手の多忙がバハマ行きを阻むに値すること、及び、しかしそれでも聞き手がバハマに行こうとしていることの確信性がそれぞれ強く、従って乖離性が非常に強い文脈であろう。例えば、「忙しすぎてそれどころじゃないといいながらもまだバハマに行くなどと言う馬鹿げたことを語っている」といった辛辣な批判であったり、失笑を伴う驚嘆であったりと、豊かな感情表出が強いレベルで伝達されている場合を想定しよう。そのような場合、(11d)は、(11a)や(11b)に見られるような情報要請または情報確認の意図が弱いか消失しており、修辞性の強い解釈となり得る。[3]

ここで、話者の「驚嘆」の感情が様々なタイプの疑問文に伴われ得ること―つまり、驚嘆を伴う情報要請の疑問文、驚嘆を伴う修辞疑問文、といえるような事例が存在すること―について補足しておく。次の(12c)のTomの発話は情報要請や確認疑問文に類するものというよりはむしろ修辞的な例であるといえよう。

(12)［トムは好意を抱いているメアリーを12月24日にトムの家で行われるクリスマスパーティに呼んだが、メアリーは来なかった。次の日、トムはメアリーに会い次のやりとりをする］

a. Tom: Why didn't you come to the party yesterday?

b. Mary: I went to the zoo.

c. Tom: Did you go to the zoo yesterday?!

(13)発話(12c)の高次表意

a. Tom is asking Mary if P.(P = Mary went to London Zoo on the 24th of December, 2005.)

b. Tom is surprised that P. (Nishikawa 2010 より修正引用)

Nishikawa (2010)によると、(12c)の発話における発話者 Tom の驚嘆の感情は、話者の既存の想定である「メアリーが24日のクリスマスパーティに来る」という想定との間に乖離を示す(12b)の新情報「動物園に行った」という想定に向けられている。(12c)の命題内容が真であることは(12b)により明らかであることから、(12c)の発話は、情報要請や確認の意図を伝達しているというよりもむしろ、修辞性の強い疑問文であるといえる。ただし、(12c)の修辞性認知は、驚嘆の感情それ自体によるものではなく、発話の帰属性に依拠するものであると考える[4]（発話の帰属性については３節に詳述する）。

以上、発話の話者態度が命題内容Ｐを埋め込んだ高次表意として復元され得る事例をみてきたが、次節では、感情表出に関わる話者態度が高次の表意ではなく推意として表示され得る事例をみる。

２．２　推意として復元される話者態度

(14)を見よう。

(14)［８時から始まる講演会で、８時になったのにゲスト・スピーカーがなかなか姿を見せず、聴衆の一人が一緒に参加している友人に次のように言う］

Do you know what time it is?

(14)の発話解釈過程においては、(15)の命題内容を埋め込む(16)の発話行為に関わる話者態度に加え、感情表出に関わる話者態度（例えば驚嘆、苛立ち、皮肉的態度、等）も復元される。だが、感情表出に関わる話者態度は(17a)-(17c)のような命題態度として復元されるとは思えない。

(15) a. The hearer knows it is X o'clock.（論理形式）

b. The hearer knows it is 8 o'clock.（**命題内容**）(=*P*)

(16) The speaker is *asking* whether it is true that the hearer knows it is 8 o'clock.

(17) a. *??* The speaker is surprised that *P*.

b. *??* The speaker is irritated that *P*.

c. *??* The speaker is sarcastic to the thought that *P*.

(14)の発話者の、驚嘆／苛立ち／皮肉的態度といった感情表出は、(19b)のような推意の一部として復元され得るのではないだろうか。(18a)および(18b)は共に演繹推論の前提として機能するが、帰結されるはずの推意(18c)と文脈情報(19a)とが矛盾を引き起こし、そこから生じる感情表出がなされていると考えるのが妥当であろう。

(18) a. *implicated premise*: If it is 8 o'clock, it is time the guest speaker appeared.

b. *implicated premise2*: It is 8 o'clock.

c. *implicated conclusion*: *??* The guest speaker appears.

(19) a. The guest speaker does not appear.

b. The speaker is *surprised/irritated/sarcastic to the thought* that the guest speaker does not appear.

発話解釈過程における話者態度が、発話の推論プロセスを経て復元される表意、推意のいずれかに貢献する（即ち、表意または推意を形作る概念の一部を成す）ことを見てきたが、次節では、話者の感情表出等、思考の「表示」の適切な「解釈」がもたらす認知効果について詳細を見る。

3．思考と解釈

3．1　解釈的類似性

Sperber and Wilson(1995)では、「すべての発話が表出する命題が、話者が伝達する思考の解釈である」とする「解釈的類似性」の概念を導入している。解釈的類似の概念の定義は以下の通りである。

Interpretive resemblance

We will say that two propositional forms P and Q interpretively resemble one another in the context C to the extent that they share analytic and contextual implications in the

context C.

（２つの命題形式ＰとＱは、コンテクストＣにおいて分析的含意とコンテクスト含意を共有すればするほど、コンテクストＣにおいてお互いにより解釈的に類似している）

（Wilson and Sperber 1988: 138（**東森・吉村** 2003: 103））

すべての発話は基本的なレベルにおいては解釈的であるという前提の下、解釈的類似の概念の核となるのは図１が示すような「記述的（descriptive）表示」と「解釈的（interpretive）表示」という２つの異なる表示方式である。記述的表示とは、ある発話や思考が現実の状況を表示する場合であり、一方解釈的表示とは、ある発話や思考がそれらに類似した他の発話や思考を表示する場合である。これらの表示は４つのサブタイプに分けられ（図１の(a)-(d)）、それぞれ異なる文タイプと関連づけられている。「現実の状況の記述」は平叙文発話[5]が、「望ましい状況の記述」は命令文発話が、「望ましい思考の解釈」は疑問文発話及び感嘆文発話が、そして「他者に帰属する思考の解釈」は引用符で記された発話やアイロニー発話等が該当する。

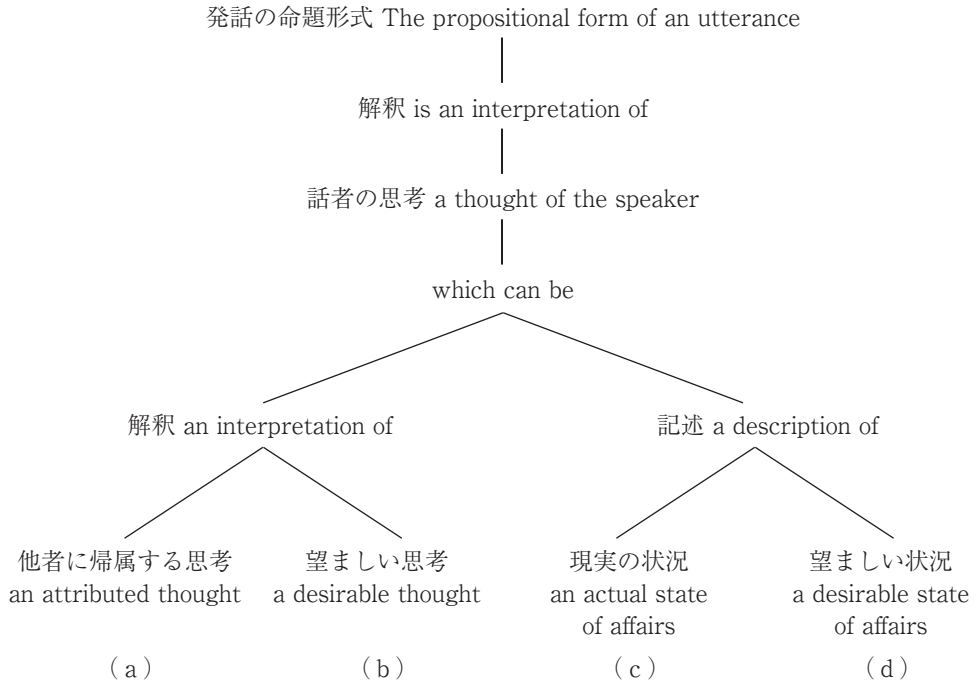

図１.

（Sperber and Wilson 1986: 232、日本語は筆者による）

例えば、窓を打つ水滴に気づいたとき、或いは雨の音が聞こえたときに(20a)を発話すれば、現実の状況の記述的表示といえ、一方、(20b)は、(20a)が発話されるような文脈での、望ましい状況の記述的表示といえる。

(20) a . It is raining.
　　b . Bring an umbrella.

疑問文発話(21a)や感嘆文発話(21b)は、(22)のような「不完全な」論理形式を表すため、いかなる現実の状況をも描写しない。不完全さが補われた命題形式は話者または聞き手の観点から望ましいとされる思考または信念を「解釈的に」表示する。

(21) a . How expensive is it?
　　b . How expensive it is!
(22) **論理形式**：It is _____ expensive.

疑問文発話が伝達する思考の「望ましさ」は、しばしば「関連性」に置き換えられる（Sperber and Wilson 1995[2]: 232, Figure 3-(b)）。また、思考が「関連性がある」ということが示すことは、「それが然るべき認知効果をもたらす思考である」ということである。(21a)のような疑問詞疑問文の話者は、疑問文の答えに相当する思考が、話者の観点から望ましい（即ち、関連性のある）思考であることを伝達する。一方、yes-no疑問文については、２つの望ましい思考（即ち、相反する極性を持つ可能な答えに相当）のいずれかを表示する。次の(23)の発話が伝達することは、発話の望ましい（関連性のある）思考が(24a)または(24b)のいずれかのうち、発話時の世界の状況に合致するものである」ということである。

(23) Is it expensive?
(24) a . It is expensive.
　　b . It is not expensive.

３．２　望ましい（関連性のある）思考と修辞性

いかなるタイプの疑問文発話も「望ましい（関連性のある）思考」の「解釈的表示」という観点からの説明が可能であるとすれば、発話が表出する思考が「誰にとって関連性があるのか」ということが話者・聞き手間で顕在的であることが重要である。Wilson と Sperber (1988)では、疑問文の２種のサブタイプに関わる解釈を提案している。それは即ち、「話者にとって関連性

のある思考を伝達する疑問文」と「聞き手にとって関連性のある思考を伝達する疑問文」を指す。(1)の各疑問文発話を再考する。

(1) a. [**週末に友人がバハマに行くといっていたことを思い出し**]
Are you going to the Bahamas this weekend? (**情報要請の確認疑問文**)
b. [**招待したパーティに来なかった人が実は動物園に行っていたと聞いて驚いたように**]
Did you go to the zoo yesterday?! (**驚嘆の感情を伴う疑問文**)
c. [**チョコレートを片方の手のひらに隠して**] Which hand is it in? (**当て推量疑問文**)
d. [**面接試験官が受験者に**] What are the binding principles? (**試験疑問文**)
e. [**話者は１人で部屋にいるが、窓の外を見ながら**]
Why do the leaves of different trees go different colours in autumn? (**思索的自問**)
f. [**友人たちとくつろいだ雰囲気での談笑中、話のタネとして**]
Now, who is going to win the by-election tomorrow? (**思索疑問文**)
g. [(1f)**と同じ状況において、友人たちに向かって**]
Have politicians ever kept their promises? (**皮肉的態度を伴う疑問文**)
h. [**満天の星を観ながら、恋人に**] How many stars are there in the sky? (**修辞疑問文**)
i. [**大学の講義で、教授が学生に**]
What are the main objections to this approach? First, … . (**解説疑問文**)

Wilson and Sperber (1988)によると、疑問文発話の可能な答え（命題内容に相当する、関連性のある思考）という観点からは、(1a)のような情報要請性の強い疑問文は、聞き手に期待する情報（＝答えの想定）が話者の認知環境を修正する認知効果をもたらす点で、話者にとっての関連性の見込みを伝達する発話である。一方、(1g)及び(1h)の修辞性の強い発話では、話者から聞き手に情報提供することで聞き手の認知環境を修正する認知効果をもたらす点で、聞き手にとっての関連性の見込みを伝達する発話である。つまり「情報要請性」と「情報提供性(修辞性)」の認知が、疑問文発話解釈の要となる、という見解であるともいえる。この見解に即して Wilson and Sperber (1988)では、(1a)-(1f)に類する発話は「話者にとって関連性のある思考を伝達する疑問文」であり、(1g)-(1i)に類する発話は「聞き手にとって関連性のある思考を伝達する疑問文」であるとしている。つまり次のように２分類される。

(25) a. 話者にとって関連性のある思考を伝達する疑問文：
情報要請の疑問文（確認疑問文含む)、驚嘆の感情を伴う疑問文、当て推量疑問文、試験疑問文、思索的自問、思索疑問文

b. 聞き手にとって関連性のある思考を伝達する疑問文：修辞疑問文、解説疑問文

(1a)、(1g)、(1h)以外の発話解釈についても以下に詳述する。(1c)の当て推量疑問文、(1d)の試験疑問文は共に、話者がすでに答えを知っており、聞き手にその情報を要請する、情報要請というよりは、「答えの提供」という行為の要請であるが、関連性の見込みという観点からは、情報要請と同様に話者にとっての関連性の見込みを伝達する。Wilson and Sperber (1988)によると、試験疑問文発話の「行為」とは、「答えを知っていることを表明する行為」であり、当て推量疑問文発話の「行為」とは、「聞き手が正しく推量できることを表明する行為」であるという。Clark (1991: 150)もまた、当て推量疑問文の話者の目的は聞き手が答えを知っているかどうかを探ることではなく、聞き手が正しく推量できるかどうかを探ることであるという。(1c)、(1d)のいずれの疑問文においても問いの答えが聞き手によって提供されることが期待されており、提供された答えが聞き手の「(答えを提供する) 能力」の表明となる。

(1e)の (思索的) 自問とは、話者は答えを知らないが、聞き手の存在を必要としない中で産出されることから、答えが提供されることを全く期待しない疑問文を指す。(1f)の思索疑問文とは、話者は答えを知らないが、聞き手が答えを知らないことを承知しており、従って聞き手から答えを提供してもらうことを期待していない疑問文のことである。(1i)の解説疑問文は、話者が聞き手から答えを引き出すことに関心を持っておらず、話者自ら答えを (発話が終わるやいなやすぐに) 提供する意図があるという点で、聞き手にとっての関連性の見込みを伝達する疑問文である。

また、疑問文発話の聞き手は、疑問文が伝達する思考が発話者と聞き手のいずれの観点から関連性があるのかの査定だけでなく、そのサブタイプの疑問文を区別するために、更なる文脈想定を呼び出す必要がある。(26)と(27)を見てみよう。

(26) a. Mary: Where did I leave my keys?
　　b. Peter: In the kitchen drawer.
(27) a. Peter: Will they keep their promises?
　　b. Mary: Have politicians ever kept their promises?

(Wilson and Sperber 1988: 97-98より修正引用、下線は筆者による)

(26a)は、「情報要請」または「(思索的) 自問」としての解釈が可能だが、情報要請となるのは、話者メアリーが、疑問文の答えが話者自身にとって関連性のある (つまり特定の認知効果がもたらされる) 思考であると信じており、聞き手であるピーターが答えを知っており答えを提供できるとメアリーが期待しているような場合である。また、自問となるのは、話者メアリーが、

疑問文の答えが話者自身にとって関連性のある思考であると信じているものの、聞き手ピーターが同じ部屋に今いることに気づいていない（が発話後、ピーターの応答(26b)により気づく)、といった場合が挙げられる。

一方、(27b)は「解説疑問文」または「修辞疑問文」としての解釈が可能であるが、解説疑問文となるのは、話者メアリーが疑問文の答えを既に知っていて、ピーターにそれを知らせたいと思っているような場合であり、修辞疑問文となるのは、話者メアリーが疑問文の答えを既に知っていて、疑問文の答えがピーターとの間で相互に顕在的な想定となることを望むリマインダー（reminder、想起させるもの）としての機能を持つような場合である。

３．３　帰属性と修辞性

疑問文発話の解釈的表示は「望ましさ」の観点だけでなく、「帰属性」の観点からも説明されるべきであるということは、次の(28)のような事例から明らかである。「命題の帰属性」の解釈的表示は、修辞性の認知に深く関わるものである。

(28) John sighed. *Would she never speak?*

（ジョンはため息をついた。もう二度と話をしないわ、だって？）

（Wilson and Sperber 1988: 100、イタリック表記、及び日本語訳は筆者による）

(28)において、自由間接話法（描出話法）による第２文は、他者の思考についてのジョンの心的表示を伝達する、「エコー的発話」である。つまり、(28)は、「sheに帰属する思考（即ち、sheの信念としての命題内容she would never speak)」の心的表示を伝達する。(27)の第２文が、情報要請の疑問文ではなく修辞的あるいはいくらかの修辞性を伴うことは、第１文の「ジョンがため息をつくような文脈」から明らかである。この第１文がなければ、情報要請、或いは自問的思索疑問文としての解釈も可能であろうが、その場合は、「非帰属的発話」であるとみなされる。このような帰属的思考への話者態度を伝達する疑問文発話は、概して修辞的であるといえる。言い換えれば、典型的な修辞疑問文とみなされる発話は、帰属的思考への何らかの話者態度を伝達するものであろう。(1g)では、命題内容 The politicians have kept their promises.がpoliticiansに関して一般の人々が抱き得る思考であるといえ、この一般的思考（universal desire[6]）に対する話者の乖離的態度（dissociative attitude[7]）を伝達しているといえる。(1h)についても（(1h)が修辞的であるという状況においては)、命題内容 There are X（i.e. X = countless）numbers of stars in the sky.が表示するuniversal desireに対する話者の統合的態度（associative attitude）を伝達しているといえるかもしれない。

以上見てきたように、関連性理論の解釈的類似性の観点からは、疑問文発話解釈が少なくと

も次の異なる３種の「解釈的表示」に関わっていることがわかる。

(29) a. 疑問文発話行為に関わる高次表意の復元
　b. 望ましい思考としての、疑問文の命題内容（答えに相当する思考）およびその思考に付随する話者の命題態度の復元
　c. 帰属性の解釈および帰属的思考への話者の命題態度の復元

ただし、(1)に挙げた各疑問文発話に「解釈的類似性」に基づいた解釈を与えようとするとき、いくつかの分類上（或いは分析上）の問題が生じる。次節で詳しく見る。

４．分類上の問題点

ここで、3.2節の(25)において示されている疑問文解釈の２分類に関し、２点疑問を呈する。まず、驚嘆を示す疑問文は情報要請ほかの上述の疑問文タイプと並列的に挙げるべきではない。驚嘆は、第１節および第２節で見たように、情報要請にも修辞疑問文にも伴われ得る話者感情であり、２分類のどちらか一方に区分され得る疑問文ではないものと考える。従って、(1b)の疑問文が、話者或いは聞き手のいずれにとって関連性のある思考を伝達するのかという問いへの答えは、発話の情報要請性、修辞性の認知に貢献する驚嘆の感情以外の手がかりが（明示的或いは非明示的に）与えられているか否かによって決定づけられる、ということになろう。先にも述べたように、(1b)が、(12c)として(12b)の発話の直後に産出されたものであるとすれば、(12b)の発話が命題内容の真偽値への確信性を決定づけ、修辞性認知への手がかりとなるのである。

２点目として、思索疑問文の中には、話者または聞き手のいずれの観点から関連性があるといえるのか、即ちいずれの観点から認知効果がもたらされるといえるのかについて「曖昧な」事例があることに触れておく。この点については、そもそも思索疑問文とは何か、という観点から再考しなくてはならないだろう。(26)の(A5)(A6)に挙げた思索的な疑問文の例において共通する特徴は、「聞き手が答えを知らないと話者が知っており、それゆえ聞き手からの答えを期待しない」というもので、「話者にとっての関連性の見込みを伝達する」。思索疑問文の他の事例としては、Driver (1988)が次の(30)の各例を挙げている。

(30) a. **測定不能で答えが出ない思索疑問文**
　　How many drops of water are there in the ocean?
　b. **哲学的思索を促す思索疑問文**

Does body exist?　　(Driver 1988: 247-50)

Driver (1988) の主張は、修辞疑問文と思索疑問文は区別されるべきだということである。Driverによる思索疑問文の定義は、「測定不能或いは難しくて答えが出ないため聞き手がその答えを知りようがないことを話者が知っており、よって聞き手に疑問文の答えを期待しない疑問文」であり、修辞疑問文の定義は、「疑問文の答えが話者と聞き手の間であまりにも明らかである疑問文」である。しかし、測定不能であろうが難解な質問であろうが、ある認知効果が期待できる文脈が存在すれば、思索疑問文の思索的性質は消失する。実際、(30a) は次の (31) のような設定では測定可となる。

(31) How many drops of water are in all the oceans on earth? Assume that 1 cubic centimeter contains 25 drops of water? (*Yahoo Answers: http://answers.yahoo.com/question/index?qid=20100127204749AAPchSt* , 2014年 2 月26日参照)

また、次のRohde (2006) が修辞疑問文として挙げている (32a) も、測定不可能性において (30a) に類似している。

(32) a . **発話** How many stars are there in the sky?
　　b . **関連性のある思考** There are a number of stars in the sky.　　(Rohde 2006: 156)

思索性と修辞性を分けるものは何だろうか？ (32a) が満点の星空を恋人と一緒に眺めているときの発話であれば、(32b) の話者の思考が話者と聞き手の間で相互に顕在的となり、修辞疑問文としての解釈が容易に得られるだろう。関連性のある思考 (32b) は、(32b) に類似した既存の想定を強めるリマインダーとしての機能を持つ。従って、発話の認知効果は、聞き手にとっての関連性の観点から得られる。一方、(32a) が試験疑問文や思索的自問、或いは思索的疑問であるとする解釈も想定可能である。例えば、試験問題の一部として、或いは聞き手の存在が前提ではない日常の一場面において (32a) が問われれば、発話の認知効果は、話者にとっての関連性の観点から達成されるだろう。しかし、聞き手の存在する思索的疑問文発話であるとすれば―例えば、星の見えない場所で星のことを話題にしているときに (32a) が産出されれば―(31) のような測定の可否を問う情報要請とみなすか、或いは (32) のような修辞的使用であるとみなすか、いずれの観点から関連性が達成されるのかが不明瞭であるように思われる。つまり、(32a) の発話解釈過程において、次の 2 つの高次表意のいずれか、或いは両方が復元される可能性があり、各高次表意の認知環境における顕在性の強さが疑問文のサブタイプの解釈に貢献

するのだと考える。

(33) a. The speaker believes that there are a number of stars in the sky.
b. The speaker wonders how many stars there are in the sky.

5．結語

本稿では様々な機能を持つ疑問文発話事例についての認知語用論的解釈のメカニズムの考察を行い、意味論的、語用論的に復元される種々の想定（表意、推意）を埋め込む高次の表示が解釈の鍵となること、そしてその高次の表示については、少なくとも(29)に示したような異なる3種の「解釈的表示」という観点から説明可能であることを確認した。また、驚嘆他様々な感情表出それ自体が疑問文のサブタイプの認知を決定づける要因となるのではなく、あくまでも復元され得る想定（手掛かり）の一部（一つ）に過ぎないということと、思索疑問文については「望ましさ」や「帰属性」の観点からの分析には曖昧性が残ることについて指摘し、関連性理論の枠組みにおいて再考察した。皮肉的態度を伴う発話(1g)及び(11d)や、先行発話をエコーしている命題内容に驚嘆の感情を伴う(12c)は、「他者に帰属する思考の解釈」であり、(29a)-(29c)に挙げた多層的な解釈的類似性の認知により、関連性のある正しい解釈が得られることとなる。つまり、(29a)の字義性に関わる解釈、(29b)の望ましさに関わる解釈、及び(29c)の帰属性に関わる解釈がオンラインで行われ、最適な関連性を探るために相互補完的に機能すると考えられる。更に、「望ましさ（関連性）」及び「帰属性」の程度性を認める関連性理論の見解は、修辞性の程度性と同様、思索性の程度性をも許すはずである。従って、思索疑問文であるがいくらかの修辞性を帯びている事例や、情報要請でありながら、（問いの性質上）思索的である等の、非典型的事例についても関連性理論は適切な説明を与えるであろう。

注

1．疑問文の情報要請性、修辞性が伝達する程度性は、それぞれの最大値を両極に取る一つのスケールとして表すことができる（後藤(2012)、Goto (2012)）。

2．但し、Grice の格率も、いわゆる「文法の規則」とは異なり、非遵守の場合の程度差が認められる（関連性理論と Grice の理論の対比については、例えば、内田（2013）を参照）。

3．否定疑問文では、外部否定と内部否定という意味論レベルでの多義性が、語用論により一義化されるとする議論がある（Ladd (1981)）。日本語否定疑問文においては、文末表現の豊富さからこの種の多義性を回避できる（Sudo (2010)、山森(2006)、田野村(1990)等）。

（i）～に行きませんか。(外部否定読み)

（ii）～に行かないのですか。(内部否定読み)

4．エコー発話解釈について詳しくは、Noh (2000)を、修辞性とエコー性との関連付けについては後藤(2012)を参照。

5．平叙文であっても、例えばメタファーやアイロニーといった修辞性を有する発話は、「現実の状況を記述」するのではない。修辞的発話における現実の状況との乖離性は、解釈的類似のサブカテゴリーである「(字義的意味の）ルースな（緩い）使用」や「帰属的（エコー的）使用」といった概念で再解釈され得る（Wilson (2000)、Pilkington (2000)、Noh (2000)他)。

6．Sperber and Wilson (1998)の universal desire の項を参照。

7．Echoic attitude の下位概念としての dissociative attitude を指す。Wilson (2000)、Sperber and Wilson (1992)等を参照。

参考文献

後藤リサ「アイロニーを伴う疑問文発話の関連性理論的分析」『ことばを見つめて―内田聖二教授退職記念論文集』吉村あき子他編、英宝社、2012年、200-311頁。後藤リサ「多重質問の sarcasm と修辞性」『日本語用論学会第15回大会発表論文集』８号、2013年、65-72頁。

東森勲・吉村あき子『関連性理論の新展開』研究社、2003年。

田野村忠温『現代日本語文法―「のだ」の意味と用法』和泉書院、1990年。

内田聖二『ことばを読む、心を読む―認知語用論入門』開拓社、2013年。

Blakemore, Diane (1992), *Understanding Utterances: An Introduction to Pragmatics*, Blackwell, Oxford.

Carston, Robyn (2002), *Thoughts and Utterances: the Pragmatics of Explicit Communication*, Blackwell, Oxford.

Clark, Billy (1991), *Relevance Theory and the Semantics of Non-declaratives*. Ph.D. thesis, University College of London.

Driver, J.L. (1988), "Vain Questions," *Question and Questioning*, ed. by M. Meyer, 243-251, Gruyter, New York.

Goto, Risa (2012), A Cognitive-Pragmatic Analysis of English and Japanese Rhetorical Questions. Ph.D. thesis, Nara Women's University.

Grice, H. Paul (1989), *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press, Cambridge.

Gutiérrez Rexach, Javier (1998), "Rhetorical Questions, Relevance and Scales," *Revista Alicantina de Estudios Ingleses* 11, 139-155.

Itani, Reiko (1995), *Semantics and Pragmatics of Hedges in English and Japanese*, Ph.D. thesis, University College London.

Ladd, D. Robert (1981), "A First Look at the Semantics and Pragmatics of Negative Questions and Tag Questions," *Proceedings of CLS* 17. 164-171.

Nishikawa, Mayumi (2010), *A Cognitive Approach to English Interjections*, Eihosha, Tokyo.

Noh, Eun-Ju (2000), *Metarepresentation: A Relevance-Theory Approach*, John Benjamins, Amsterdam.

Pilkington, Adrian (2000), *Poetic Effect*, John Benjamins, Amsterdam.

Rohde, Hannah (2006), "Rhetorical Questions as Redundant Interrogatives," *San Diego Linguistic Papers2*, 134-168.

Sperber, Dan. and Deirdre Wilson (1986/1995[2]), *Relevance: Communication and Cognition*, Blackwell, Oxford.（内田聖二他訳『関連性理論―伝達と認知』第２版、研究社、1999年）

Sudo, Yasutada (2013), "Biased polar questions in English and Japanese," *Beyond Expressives: Explorations in Use-Conditional Meaning*, eds. by Daniel Gutzmann and Hans-Martin Gaertner, Current Research in the Semantics/Pragmatics Interface (CRiSPI) 28, Brill, Leiden.

Wilson, Deirdre (2000), "Metarepresentation in Linguistic Communication," *Metarepresesntation: A Multidisciplinary Perspective*, ed. by D, Sperber, 411-448, Oxford University Press, Oxford.

Wilson, Deirdre (2006), "The Pragmatics of Verbal Irony: Echo or Pretence? ," *Lingua116*, 1722-1743.

Wilson, Deirdre and Sperber, Dan (1988), "Mood and the Analysis of Non-declarative Sentences," *Human agency*, eds. by J. Dancy et al., 77-101, Stanford University Press, California.

山森良枝「分析的否定疑問文の非分析的ふるまいについて」『神戸大学留学生センター紀要』12号、2006年、25-40頁。

（ごとう・りさ　英語国際学部講師）